

想像もできなかったでしょう。では現在の私たちは創立10年目に学院で学んでいた先輩たちが、はるかな未来に、そして私たち後輩たちに託した大きな夢や希望というものを想像できるでしょうか。

創立125周年を今年迎えるとき、私たちも関西学院のキャンパスに歌声を響かせながら、古い先輩たちの大きな夢と希望、期待を受け止めたいと思います。

(宗教総主事)

「感謝」への「感性」

舟 木 讓

「人生の目標について考え、その目標に向かって真摯に努力する」という事はだれも否定できない生き方です。そして、その努力が大きいほど、満足感と充実感も増大します。また、目標に到達できずとも、それまでの経験が無駄にはならないことも事実です。しかしそうした前を向いた歩みの中で心に留めていなければならないこともあります。

125年前、本学はその創立にあたり、「関西学院憲法」を制定し目標を設定しました。その中に本学は「キリスト教の主義に拠って知徳兼備の教育を授ける」という一節があります。ここで「知徳兼備」と訳されている原文は「intellectual and religious culture」です。キリスト教という一つの宗教的理念をそのルーツに持て歩んでいる関西学院が、これまで何を大切にしてきたのかがここに集約されています。宗教的な営みが大切にしてきたものは、この世の存在の相対化といっても過言ではないでしょう。表面的な「事実」に安易にレッテルを貼ることを戒め、表面に表れない「真実」を追求し続ける姿勢こそが、学問にも人生にも不可欠なことでもあります。

中でも、今ここにある「私」がいかにか多くの人々や存在に支えられてあるかという端的な事実気づき、その事に感謝することができる「感性」を持ち続けたいとき、人は自らが神の位置に立ったかのような主客転倒した人生へと転落すると言えましょう。ここまでの歩みを支えられてきたことへの「感謝」から新たな一步を共に踏み出しましょう。

(大学宗教主事)